

《研究ノート》

都市空間をかたちづくる碑文

——ギリシア語碑文の新たな可能性をめぐる——

増 永 理 考

はじめに

碑文史料が19世紀に体系的に歴史学に用いられるようになって以降、現代に至るまで、研究におけるその重要性はますます広く認識されていると言ってよいだろう。かつて西洋古代を「碑文の文明 (civilisation de l'epigraphie)」と名づけたフランスのギリシア語碑文研究の大家L・ロベールは、碑文を「用いないこと、あるいはそれをないがしろに扱うこと」は歴史家にとっての危険であるとさえ指摘している¹⁾。

今日の歴史研究において、史料としての重要性がもはや自明のものとなりつつある碑文に関して、そのテキストとしての史料性に加えて、近年、いっそう注目されているのは、モニュメントとしての碑文の特性である²⁾。実際に石などに刻まれた文字が持つ情報のみならず、全体の形状やその設置場所など、碑文の持つ非文字情報をも考察の範囲に含めることが、近年の碑文を用いた研究の一つの特色となっている。かかる観点は、古代におけるリテラシーやいわゆる「碑文習慣」といった諸論点とも関連し、「碑文の文明」たる西洋古代社会の理解にとって重要な役割を果たすと考えられる³⁾。

ところで、碑文をモニュメントとしてみる、すなわちモノとしてみるということは、ある空間を構成する一要素として理解することにほかならない。したがって、碑文というのは、古代における空間のあり方を探るに際しても、有効な史料となりうるのである。

空間を対象とする研究においても、ここ数十年の間で大きな動きがあった。1970年代頃より、H・ルフェーヴルの『空間の生産』に代表される研究を端緒として、「空間論的転回」と称される学問的認識の大きな変化が起こり、それまで静的な「モノ」として考えられてきた対象としての空間は、絶え間ない社会との関係が実体化したダイナミックな存在として考えられるようになってきた⁴⁾。すなわち、空間は人の社会から孤立した単なる物的存在ではなく、社会と恒常的に相互作用を及ぼしあっている以上、社会的生産物として理解されるべきなのである。

古代史研究にもこの新しい空間認識は流入している。例えば、P・トーネマンは小アジア西部のマイアンドロス川流域という自然環境に着目し、この広大な空間とそこに住む人々の

社会の關係に迫っている⁵⁾。他方、M・スコットは、アゴラなどの現実の空間から文学作品における認識上の空間に至るまで、様々なレベルにおける古代の空間、およびそれに関わる社会のあり方を解明しようとしている⁶⁾。古代史における空間研究において、かつては物的資料を扱う考古学に圧倒的な優位性があったのだが、「空間論的転回」以降、空間は歴史学や文学の射程に収まる対象となっているのである。

このように空間が理解されるようになっていく以上、碑文のモニュメントとしての特質に着目することは、碑文によって形成される空間とそれに関わる社会のあり方を解明することに結びつくのである。しかしながら、碑文そのものと空間を結びつけて考察した研究は依然多くはないだろう。したがって本稿では、古代における空間のあり方を探るという点で、碑文が果たす史料としての可能性を、さしあたりギリシア語碑文に限定し、試験的に論じることとする。

1. ギリシア語碑文へのアクセスの今

我々が碑文をモノとしてとらえ、さらにそれを空間に位置づけようとするとき、必要な情報をいかにして得ることができるだろうか。もちろん現地に赴いて調査するのが最善であるが、現地と地理的に隔たりのある本邦の研究者にとってそれは必ずしも容易ではない。しかし、そのような中、少なくとも我が国におけるギリシア語碑文の利用状況は目まぐるしく改善されている。公刊された史料集の普及もさることながら、インターネットの浸透、およびそれに伴う史料の電子化により、自宅にいながらも多くの碑文史料を閲覧できるようになった点は大きな変化であろう。以下では、近年大いに発展しつつあるギリシア語碑文へのアクセス状況、およびその中での碑文の空間的な情報の扱われ方について簡単に述べる。

ギリシア本土、およびその周辺に関しては、*Inscriptiones Graecae* (IG) が重要であり、冊子体として今もなお刊行されているが、*Attic Inscriptions Online* (AIO) というウェブサイトでは、数はさほど多くはないものの、IGに掲載されている一部の碑文の英訳化が試みられている⁷⁾。こちらには、英訳に加えて、碑文のタイプ、および判明するものに関しては、その碑文の元々の設置場所と発見場所がだまかに記してある。小アジアに関しては、発掘状況の進展を踏まえて、近年続々と史料が刊行されている。中でも注目されるのは *Monumenta Asiae Minoris Antiqua* (MAMA) シリーズである。同シリーズは小アジア内陸部で出土した碑文に強い史料集であるが、とりわけ最新の第11巻に収められている史料は、全てウェブ上に公開されている⁸⁾。個々の碑文について、発見場所は記されているが、元々の設置場所に関する情報はなく、出土碑文を空間的に再構成することは困難である。しかしながら、ほとんど全ての碑文について、写真と一緒に掲載されており、碑文の全体的な形状についてはある程度把握することができる。

以上のように、最近では史料の電子化傾向が進展し、そのテキストや空間的な情報に容易

にアクセスできるようになりつつある。その最たるものとして、ウェブサイト *Inscriptions of Aphrodisias 2007 (IAph2007)* が挙げられる⁹⁾。これは小アジア南西部の都市アフロディシアスで出土した碑文史料をほとんど網羅しており、英訳やコメントリーの充実ゆえたいへん有益である。また同サイトでは、史料の電子化の利点が最大限に生かされており、時代や碑文の内容などの様々なカテゴリーに基づいて、即時に分類することが可能である。さらに、個々の碑文の空間に関する情報が緻密に記載されている。わかるものについては、碑文の発見場所から元来の設置場所、そして発見に関する経緯に至るまでの情報を我々は得ることができるのである。上述の *MAMA* 第 11 巻のサイト同様、こちらにおいてもほとんど全ての碑文に関して、写真も併せて掲載されているので、碑文そのものを視覚的にイメージできるようになっている。

近年の史料の電子化により、我々は実際の碑文を写真として見ることができるようになってきている。現存の碑文史料が電子化される限り、インターネット上で閲覧できる写真の数は今後増えていくことだろう。したがって、少なくとも碑文をモノとしてとらえることは、日本にいながらでも可能なアプローチであるとともに、今後、その発展が期待されるのである。しかしながら、これだけでは碑文を空間的に位置づけるには不十分である。何より、碑文の元々の設置場所に関する情報が必要不可欠となってくる。上述の *MAMA* 最新刊のサイトでは、この種の情報は皆無であり、*AIO* にしても、元々の *IG* がそうであるように、碑文の位置情報については曖昧であり、厳密に碑文を空間的に再構成することは不可能である。冊子体の刊行史料についても、碑文の位置情報については、具体的に記載されているものから、ほとんど何もないものまで実に様々である。これには碑文の残存状態、あるいは発掘時における詳細な記録の有無に多大な影響を受けるので、すでに発掘された碑文に関して、その位置情報を復元することは困難をきわめる作業である。それゆえ、碑文を空間的に位置づけようとするとき、我々が扱うことのできる材料は限定的であり、また、今後もその材料が劇的に増加することは見込めない状況であると認めざるをえない。

しかし、アフロディシアスの場合のように、利用できる材料が皆無でない以上、碑文をある空間の中に位置づけて考察することは決して不可能ではなく、碑文の史料としての可能性を最大限に高めるためにも我々が取り組まなければならない課題の一つであると言えよう。かかる史料的制約を踏まえうえて、本稿では上記の問題に関する試論を提示することとしたい。

さて実は、アフロディシアス以外に、もう一つ出土碑文の位置情報が蓄積されている都市がある。それは、小アジア中南部ピシディアのテルメッソスである。同市の出土碑文はアフロディシアスのように電子化されているわけではないが、多くの碑文が元々の場所に設置された状態にあったこと、そして発掘の際もそうした空間的な情報を残そうとした結果、一定数の碑文が空間的に再構成されうるのである。まさに同市の空間において碑文が果たす役割を、近年、O・M・V・ナイフが論じているので、まず彼の議論を簡単に紹介したい¹⁰⁾。

2. テルメッソスの事例——O・M・V・ナイフの研究をもとに

ナイフが焦点を当てるのは次の碑文である。

ソテリオスの月 13 日、正当な集会において、先議委員の動議に基づき、民会によって以下のことが決議された。キンヌニスの曾孫、ピッラコアスの孫、ピアテラビスの娘たる寡婦のアタランテは、高潔な心と節制を身にまとい、あらゆる女性としての徳を示し、しばしば顕著なる出費、金銭の融通、そして寄付金、贈物、祭司職を誇りとする彼女の祖先にふさわしき労苦を都市に対して果たし、また深刻な食糧不足が起こったとき、人々に豊かな食料を提供することを約束し、その名誉ある行いを実現すべく、今年のイダリアノスの月からそれらを豊富に提供しているので、民会によって、青銅像、および金冠をもって彼女を称えるべきこと、そしてその像を都市において顕著な場所たるアッタロスのストア近く、直線の南歩道の壁に沿って建てるべきことが決議された。その場所には、少年の運動競技における勝者の報酬も建てられており、その競技は、ホプロスの息子にしてパイドノモスたるヘルマイオスが監督したものである。また、次のことも承認された。かの職人たちも、その要求にしたがって、同じ場所に、彼らが望む像を建ててよい。また次のことも決議された。民会による像にこの布告を記すとともに、職人たちによる像にも、彼らが希望することを記すべきこと¹¹⁾。

職人たちは、キンヌニスの曾孫、ピッラコアスの孫、ピアテラビスの娘たる寡婦のアタランテを称えた。彼女は、食糧不足が生じたとき、あらゆる人々に豊富な食料を提供したように、彼らの善行者であった¹²⁾。

上の碑文は、テルメッソスのアタランテなる女性の善行を称えたものであり、同市の都市化が進展し、繁栄著しい時期に当たる紀元 2 世紀末から 3 世紀初めに建立されたと推定されている¹³⁾。同碑文は、その文面にもある通り、都市の中心部にあるアゴラの西側に位置する、ベルガモン王アッタロスによるストアに設置された状態で発見されている¹⁴⁾。最初の碑文は民会による決議文であり、最後の短いものは、「職人たち」による顕彰を記している。この「職人たち」がいかなる集団であったかは明示されていない。一見これは、帝政前期のギリシア都市ではありふれた、いわゆるエヴェルジェティズムに関する碑文のようであるが、ナイフはここから当時の社会状況と都市空間の関係を見出そうとするのである。

まず、彼は前提として、同碑文は単に都市有力者のアタランテ、あるいはその家族の威光を知らしめるためのものではないということを指摘する¹⁵⁾。実際、碑文中に、アタランテを称えることを民会が決定したと記されていることから、この顕彰碑文はアタランテの気前の

良さだけでなく、都市民によって構成される民会による感謝を同時に記すことで、名誉を付与する側の重要性をも具体化しているのである。したがって、このような顕彰碑文は、従来のようにエヴェルジェティズムによって有力者が一方的に都市を独占するという像を表していたのではなく、むしろ彼ら有力者と都市民の間の権力関係を表現していたのであり、恩恵施与行為においては両者がともに重要な役割を担っていたとナイフは指摘する¹⁶⁾。

これを踏まえて、碑文の設置場所の問題が吟味される。上の碑文を含めて、アッタロスのストアからは29の碑文が確認されている¹⁷⁾。そのうち3点については私的性格がうかがえるが¹⁸⁾、残りはほとんど公的な事柄に関するものである。特に多いのが、評議会、民会、あるいは先議委員によって建立された、顕彰碑文を主とする公的性格を帯びた碑文である¹⁹⁾。もちろん、引用したアタランテ碑文もこの中に含まれる。ナイフは、その他の場所における碑文も検討したうえで、このアッタロスのストアは、とりわけ公的生活や政治的決定の記念に関する碑文に満ちており、それゆえ、都市の中心的な空間であったと述べる²⁰⁾。

引用した碑文に関してさらに注目すべきは、アタランテ碑文における「職人たち」に関する記述である。アタランテの顕彰に際しては、民会という都市の組織のみならず、「職人たち」が顕彰主体となっている。一般に職人のような身分の人々は、顕彰碑文における被顕彰者たる都市の有力者たちほど高い身分にはなく、むしろしばしば暴動の温床として不安視される存在であった²¹⁾。このような職人たちが彼らのパトロンや恵与者を称える事例は決して少なくないが、都市において名誉を付与する主体は職人に限られず、長老会や神殿関係者の団体など実に様々であり、名誉付与、ひいては自分たちに関係する碑文の建立という点で、彼ら職人たちは、絶えず都市における諸団体との競争にさらされていたと考えられる。したがって、アタランテ碑文において、民会とともに「職人たち」が顕彰を行っているということは、彼らが都市全体と価値観を共有していることを示すとともに、都市の記憶の中に彼ら自身の居場所を得ることを意味していたのである。そして、同碑文が公的碑文の多いアッタロスのストアに設置されたことは、職人たちの公的認識を高めることを意味したとナイフは強調する²²⁾。

以上のアタランテ碑文はほんの一例に過ぎない。その他、多数建立された顕彰碑文も、アタランテ碑文のように、都市における権力関係が表出したものとみるならば、被顕彰者たる都市有力者を中心とする諸関係の構築をめぐる中で、碑文というかたちで都市の空間が「生産」されていったのである²³⁾。

3. アフロディシアスの事例——劇場空間における碑文

ここからは、碑文の位置情報が充実しており、筆者自身も研究の対象としてきたアフロディシアス、中でも、比較的多くの碑文が当時の状態で保存、あるいは復元されている劇場に焦点を当て、現地での調査結果を踏まえながら、碑文から見えてくる当空間のあり方を具

体的に検討していく。上のナイフの議論はいささか静態的であったため、アフロディシアスを事例とした本章の検討では、碑文と空間の関係の時間的変化についても目を向けてみたい。なお、本稿で用いる写真はすべて筆者自身が2015年8月に撮影したものである。

アフロディシアスは、小アジア南西部、マイアンドロス川南のギリシア都市であり、現トルコのアイドゥン県ゲイレ村近郊に位置している。前1世紀初頭、小アジアで勃発したミトリダテス戦争において、ローマ側を終始支持したことを一つの契機として、前39年、ロー

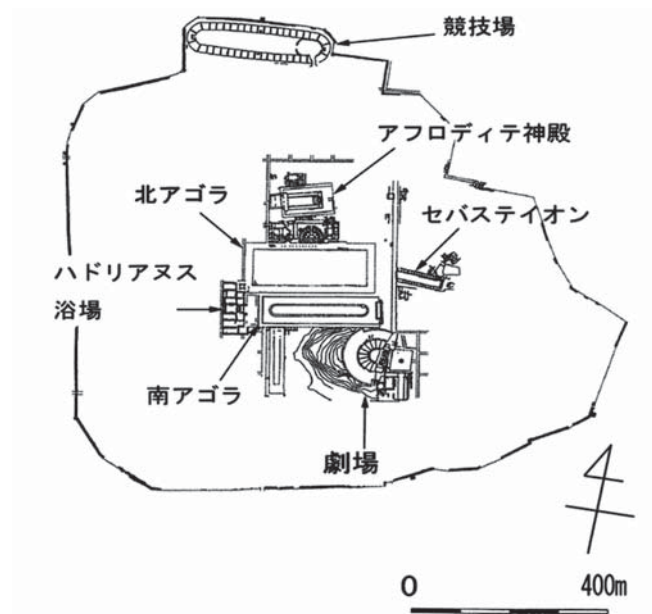


図1 アフロディシアスの都市プラン ※ Ratté (2002) 6 をもとに筆者が作成。



図2 北側から見た現在の劇場

マより自治の承認や税金の免除など自由都市としての特権を付与され、基本的に帝政期を通して、この地位を保持し続けていた²⁴⁾。共和政末期から帝政初期にかけて、公共建築物が建設されるなどして都市化が進展し、一般的なローマ期のギリシア都市の景観を備えるようになった²⁵⁾。このような流れの中、前1世紀末ごろ、同市南部に劇場が建設されたと推定されている²⁶⁾ (図1, 図2)。他のギリシア都市同様、アフロディシアスでも劇場は、様々な見世物が開催される場であるとともに、民会といった都市民による政治集会の場でもあった。以下では、同市劇場に設置されていたことが確定的な碑文をもとに、劇場の空間としての歴史の変遷を追っていく。その際、いくつかの特徴的な時期に分けて考察を試みる。

(1)

まずはおよそアウグストゥス帝期から2～3世紀にかけての時期が一つの区切りであろう。この時期に劇場に建立された碑文は、都市の善行者に関するものが多数を占めている。前28年のC・ユリオス・ゾイロスから3世紀初頭のM・アウレリオス・メネステオス・スコパスに至るまでの10人に関する計16点の碑文が確認される。彼らの善行内容については、およそ3種類に分類することができる。一つは、C・ユリオス・ゾイロスによる舞台の建設や、アリストクレス・モロッソスによる座席空間の整備といった劇場設備に関するものである²⁷⁾。彫像の奉献、および修復も3点確認されるが、劇場空間の整備に関係するということで、このカテゴリーに含めてよいだろう²⁸⁾。もう一つは、ホシディオス・ユリアノスのように、競技祭開催に関するもの²⁹⁾。そして最後が、T・クラウディオス・ディオゲネスのように公職の歴任を都市の評議会、および民会が顕彰しているケースである³⁰⁾。

このように、善行内容の違いこそあるが、これらの碑文の設置場所に注目すると、約半数が *scaenae frons* と呼ばれる、ローマ風の劇場に特徴的な舞台背景、ここに文字が刻まれていたことがほぼ確実である³¹⁾。現在では、3層構造と推定されている舞台背景のうち、最下層の柱、およびアーキトレーヴが残存し、復元されている (図3)。そして、図4はその一部を拡大したものである。ここに刻まれる文字が、どれほどの人々に読まれていたかは明言できないが、少なくとも、帝政初期におけるこれら碑文の多くは、舞台という自ずと人々の視線が集まるところに配置されていたのである。図4にあるように、これら碑文の中でもひととき大きな文字で次のような文言が刻まれている。

カイサルの息子ユリオスの解放奴隷たるガイオス・ユリオス・ゾイロスは、続けて10度ステファネフォロスを務めた後、アフロディテと民会に対し、あらゆる装飾とともに、舞台とその背景を (捧げた)³²⁾。

これは共和政末期に活躍したC・ユリオス・ゾイロスに関する建築物奉献碑文である。舞台背景の中で最も大きな字で刻まれているこの碑文は、劇場最上段の座席からも判読可能なほ

どである。このゾイロスは、オクタウィアヌス（アウグストゥス帝）の解放奴隷であるが、アフロディシヤスがローマに忠誠を誓い続けた背景に彼の活躍があったと考えられている³³⁾。結果的に前 39 年の元老院決議によって特権が同市に付与されたことを考慮すると、舞台背景におけるゾイロス碑文の文字の大きさは、彼の同市に対するより重要な貢献を反映してい



図 3 現存の舞台背景の全体像



図 4 舞台背景の拡大図

るのかもしれない。

残りの善行者の碑文はどうだろうか。そのうち4点については、元々の設置場所にて碑文を確認することができる。ユリウス・クラウディウス朝期に活躍したアリストクレス・モロッソスによる、劇場の座席、控え壁などの建築物奉献碑文のうちの 하나가劇場の北西の壁に当時のまま設置されている³⁴⁾(図5)。同碑文は、アフロディシアスの東側を南北に貫くメインストリートから劇場へ向かう途中、劇場入口手前の壁に刻まれており、同市の中心部から劇場へと足を運ぶ者の多くが目にするように配置されたと考えられる。このモロッソスに関する碑文は他にいくつか出土しているが、劇場に設置されたものであるとの推測がなされているだけで、正確な場所については不明である³⁵⁾。



図5 モロッソス碑文

次にティベリオス・クラウディオス・ゼロスに関する建築物奉献碑文がある³⁶⁾。女神アフロディテ、アントニヌス・ピウス帝、カエサルとしてのマルクス・アウレリウス、皇帝家、そして祖国(πατρίς)に対して、柱やその上のエンタブラチュアなどを捧げることを伝える同碑文は、次ページ図6の実線箇所のように舞台前方の縁の部分全体にわたって刻まれている。彼の名は顕彰碑文における被顕彰者として、上述の舞台背景における碑文においても見出される点は注目に値する³⁷⁾。彼に加えて、2～3世紀の人物と推定されている祭司長のティベリオス・クラウディオス・アポロニオス・マルキアノスに対する碑文も、ゼロス碑文よりは短いものの、同じように舞台の縁の北側部分に刻まれている³⁸⁾。

上のゼロスは、別の碑文からC・ユリウス・ゾイロスの子孫と思われるユリアと結婚したことが知られている³⁹⁾。したがって、ゼロスはゾイロスの家系に組み込まれたことが示唆さ

れるのである。さらに、このゼロスと同様、劇場の舞台縁に碑文を持つアポロニオス・マルキアノスがともに「ティベリオス・クラウディオス」の名を有していることから、彼らの間にも何らかの姻戚関係が存在した可能性が生じてくる。以上が妥当ならば、劇場の舞台という空間を、ゾイロス、および彼の家系に属する者たちに関する碑文が多数占めていたのである。果たして、これもゾイロス家のアフロディシアスに対する貢献の大きさを物語っているのだろうか。この点については推測にとどまらざるをえない。



図6 ゼロス碑文

残る1点の碑文も興味深い場所に刻まれている。M・アウレリオス・メネステオス・スコパスは、3世紀ごろ、劇場のオーケストラの仕切り壁を、女神アフロディテ、カラカラ帝とその家族、および祖国に対して奉獻しているのだが、そのことを伝える碑文は、まさに彼が奉獻したと考えられるオーケストラの仕切り壁に刻まれている⁴⁰⁾(図7)。こちらは、舞台背景や舞台の縁における碑文とは異なり、基本的に観客席から見ることはできないが、劇場に入る際には目にすることが可能である。なぜ、舞台よりは人々の視界に入りにくい、このような場所に碑が刻まれたのであろうか。これにはスコパスの奉獻物がまさにこのオーケストラの仕切り壁であったということ、それに加えて、既述のように、舞台がゾイロス家の人々に占有されていたことが原因として考えられないだろうか。舞台にはすでに多くの碑文が存在しているため、その中で埋もれてしまうよりは、舞台とまではいかずとも、劇場に入ってくる多くの人々の目に留まるべく、少しでも目立たせようという工夫が施された結果なのかもしれない。いずれにせよ、碑文の設置場所については、意図されたものであるか否かは断

定できないが、一定の「住み分け」が行なわれていたことが推測されるのである。その「住み分け」に何らかの意図が反映されているとすれば、ここからは都市の善行者同士の競争を読み取ることができ、劇場はまさに彼らの社会的関係を体現する空間として理解されよう。



図7 スコパス碑文

もちろん善行者に関する同様の碑文は、劇場以外にも、アフロディテ神殿やアゴラにおいて一定数出土しているのだが、この種の碑文が劇場の舞台に刻まれていることの意味は大きいのではなからうか。これらの碑文が刻まれた時期には、劇場では劇役者や剣闘士に関するグラフィティが発見されていることから、見世物が催されていたことは確実であり、また民会も開催されていたということも一般的に認められている⁴¹⁾。神殿やアゴラは、個人や集団といった様々なレベルで人々が集う場所であったので、そうした場所に碑文が設置されることは、他の人々の目につきやすいという点で重要だったかもしれないが、劇場はそれ以上に、人びとがある共通の目的のもとに集団で一堂に会する空間だったのである。このような点で、都市内部の他の空間と一線を画する劇場の、中でもそこに集う大多数の人の視界に入る舞台に刻まれた碑文というのは、ある程度その内容が認識されていたとすれば、より確実に強い印象を人々に与えていたと想定することができるのである⁴²⁾。

さて、当該期は都市において公共建築物が相次いで建設され、都市化が進められたことが大きな特徴である。さらにこれと並行して、顕職を歴任する人物が続々と登場するという社会的な発展もみられた。まさにこのような時期に、劇場の舞台を主とする場に善行者に関す

る碑文が刻まれていったのである。したがって、ここから明らかとなるのは、都市の変わりゆく景観、あるいはその社会的な発展と軌を一にする碑文の姿である。都市景観の変化という物質的な意味での都市の変遷は、碑文を刻む機会、そしてアフロディシアスの劇場のように、実際に碑文を刻む場所を提供することとなった。同時に、公職歴任者の出現といった社会的変化もまた、碑文を刻む機会の増加に結びついた。同市の場合、これらの変化が舞台という同一の空間に碑文として表現されていたのである。

加えて、劇場の舞台における碑文からは、同市発展の礎を築いたとも考えられるゾイロスの家系に属する者たちの名前を多数確認することができた。このことは、ゾイロス家の威信を他の市民に知らしめるのに一役買ったかもしれない。それゆえ、舞台という空間は、社会の発展とともに変化する公的な空間であると同時に、都市におけるある有力家系による占有という点では、私的空間としての側面も有していたと言えるだろう。そしてまさに碑文こそが、かかる両義的な空間のあり方を体現していたのである。しかしながら、我々は常に碑文の設置場所に関して、いかなる主体にイニシアティブがあったかに注意せねばならない。上に引用したゾイロス碑文では、一見するとゾイロス本人が碑文を建立したかのような印象を得ることができるが、それは定かではない。他方、舞台背景に刻まれたティベリオス・クラウディオス・ゼロスに対する顕彰碑文では、顕彰主体として、「評議会、民会、長老会、および若者会」が明示されており、さらにティベリオス・クラウディオス・アポッロニオス・マルキアノスについては、「祖国（πατρίς）」が彼を称えたことになっている。奉獻の対象としても「祖国」が含まれていることは、すでに見た通りである。このことは、ナイフも指摘するように、彼らの顕彰に際して、何らかの交渉、協議が行われたことを示唆しており、それゆえ、碑文の設置場所に関しても、都市の公的組織の意向が反映された可能性は十分に認められるだろう⁴³⁾。以上を踏まえるならば、アフロディシアスにおける善行者に関する碑文、そしてそれらが設置された劇場という空間についても、先のナイフの指摘のように、彼ら善行者と都市の社会的関係の中で考察されるべきではないだろうか。

(2)

2つ目の特徴的な時期は、1つ目の時期と重複するところがあるが、2～3世紀である。当該期を特徴づけるのが、劇場入口に設置されたいわゆる「アーカイヴ壁」である（図8）。これは、オクタウィアヌスからゴルディアヌス3世の間、時代にして、前1世紀末から3世紀前半に至るまで、皇帝の手紙をはじめとするローマ中央当局との関係、とりわけアフロディシアスの自由都市としての特権承認に関する碑文群である⁴⁴⁾。この碑文の設置場所は、図8のように劇場の北側入口の壁一面である。文字の高さは約2cmで、最も高い所で5mほどの位置にある。この碑文を建立した主体について確実なことはわからないが、全体として都市に関係する碑文であることから、個人というよりは都市側によって建立されたと考える方が妥当であろう。碑文建立時期についても、明確に特定されてはおらず、字体などからおよ



図8 「アーカイヴ壁」

そ2～3世紀と推定されている。

「アーカイヴ壁」の命名者であるJ・レイノルズは、この碑文群の設置時期は、セプティミウス・セウェルス帝からセウェルス・アレクサンデル帝のころ、すなわち3世紀前半ごろと推定しており、設置の意図に関しては、セウェルス朝にアフロディシアスが伝統的に保持してきた特権を承認してもらうためであったと述べる⁴⁵⁾。そしてその後には、他都市に対して、自都市の特権を犯されないよう警告する機能を果たしていたと彼女は指摘する。

他方、A・カニオティスは、この「アーカイヴ」という名称に警鐘を鳴らしている⁴⁶⁾。これらの文書は漠然と網羅的に集められたというよりは、アフロディシアスが意図的に選択したものであると彼は強調する。その根拠の一つとして、同市の特権に関して、他都市に宛てられた皇帝の手紙もこの「アーカイヴ壁」に含まれていることが挙げられる。例えば、オクタウィアヌスがエフェソスに宛てた手紙には、自らの父であるカエサルがかつてアフロディシアスのアフロディテにエロス像を奉献したにもかかわらず、それがエフェソスにてアルテミスに奉献されているので、適切な場所、すなわちアフロディシアスへ返還すべしと記して

ある⁴⁷⁾。また、トラヤヌス帝がスミルナに宛てた手紙では、スミルナにおけるアジアの神殿で、自由都市たるアフロディシアス出身の人物が奉仕を行っているということで、彼の出身都市の格を考慮して、彼をその奉仕から解放せよと命じている⁴⁸⁾。以上のような手紙をあえて「アーカイヴ壁」に含めていることから、他都市との比較の上に、アフロディシアス自体の都市としての優位性を強調しようとする競争意識を読み取ることが可能なのである⁴⁹⁾。

以上を踏まえて、同碑文群で何より興味深いのは、刻字の内容と碑文建立時期のずれである。2～3世紀のほぼ同じ時期に、同時代の文書のみならず、共和政末ごろ、つまり最大で200年前の出来事を示す文書までもがここに刻まれたのである。さらに、碑文の設置場所という点でもずれが生じている可能性がある。このことが顕著に表れているのが、次の引用箇所である。

この元老院の決定とこれに加えられるプララサ・[アフロディシアスの]民会[との誓いを]青銅版に刻み(中略)アフロディシアスにおける[アフロディテの]神殿、そしてプララサとアフロディ[シアスのアゴラ?のよく見える場所に設置すべきである]⁵⁰⁾。

これは、「アーカイヴ壁」に刻まれている、アフロディシアスに前39年に与えられた特権に関する元老院決議の一部である。復元によるところが多いのだが、この元老院決議の文面には、碑文の設置場所として劇場は指定されていないことがわかる⁵¹⁾。同決議を要約したものが「アーカイヴ壁」に含まれているのだが⁵²⁾、ここに刻まれた以外に、都市の他の場所において同内容の碑文は現在のところ出土していない。もちろん、この劇場のものはコピーであり、オリジナルの方がすでに消失した可能性は十分にありうるのだが、いずれにせよ、「アーカイヴ壁」の設置に際して、アゴラや神殿と同等、あるいはそれ以上に重要な場所として劇場が選択されたことは間違いないだろう。つまり、「アーカイヴ壁」設置の主体が都市であるならば、都市があえてその設置場所として劇場を選択したということであり、これら碑文の設置によって劇場を何らかの特殊な空間にしようとしていたと理解することができるのである。

類例として、紀元2世紀半ば、アフロディシアスと同様、属州アジアに属するエフェソスのローマ人、C・ウィビウス・サルタリスが設立した基金に関する長大な碑文の中に、その設置場所の一つとして劇場を指定する箇所が確認される⁵³⁾。この碑文も、アフロディシアスの「アーカイヴ壁」同様、劇場の入口付近の壁に設置されていたとされている。この碑文を取りあげたG・ロジャーズは、刻字が1～4cmと小さく、また高いところではおよそ4mにも達し、到底読まれることを想定して刻まれたものではないと指摘する。エフェソスの人々の多くがこのテキストを読むことができなかったとの想定に立つならば、この碑文は、文書の印象的なディスプレイとして、サルタリスの基金を象徴させる意味合いがあったというのがロジャーズの主張である⁵⁴⁾。

字体の大きさなどから、物理的に読むことができるかという点については、アフロディシアスの「アーカイヴ壁」もサルタリス碑文と同様のことが言えるかもしれないが、実際のところはわからない。しかしながら、サルタリス碑文同様、何らかのシンボリックな意味合いがそこに込められたことは十分に想定されうる。では、アフロディシアスの場合、一体それは何であろうか。カニオティスに従うならば、この碑文に象徴されているのは、同市が保持してきた自由都市としての特権とそれを承認してきたローマとの関係に関わる選択的な記憶である。アフロディシアスは、自らがいかに特権的な都市であるのか、現在に至るまでいかなる歩みを進めてきたのかということを、強烈な印象を与える長大な碑文というかたちで誇示しようとしていたと考えられる。すなわち、この「アーカイヴ壁」は都市の輝かしい——選択された——記憶を視覚化する機能を果たしていたのである。さらに、記憶を伝達するその碑文が劇場という場に配されて初めて、その空間はまさに「記憶の場」として作用していたのではないだろうか⁵⁵⁾。確かに、「アーカイヴ壁」設置以前も、劇場やその他の空間でも都市の善行者に関する碑文が蓄積され、各々が「記憶の場」としての側面を有していたと考えられるが、「アーカイヴ壁」の設置によって、劇場は都市において最も顕著な「記憶の場」となったのである。

劇場の「記憶の場」としての側面は、別の碑文からもうかがうことができる。コタスなる人物が、アポロニオスの息子アルテミドロスの彫像をデーモスに奉献したことを伝える碑文がある⁵⁶⁾ (図9)。この出来事そのものは、字体などから前1世紀末ごろと推定されているが、後に同碑文は、正確な時期については不明だが、劇場の座席を支える両端の壁のうち、北側の壁の一部として再利用されている。しかしながら、それは単なる石材の転用には思われない。というのも同碑文は、図のように階段状に積み上げられた石材のまさに段となっている部分の水平部分に刻まれているのだが、ちょうど碑文の文字全体があらわになるように石材の積み重ね方が調整されていることがうかがえるのである。というのも、碑文の冒頭に渦巻き模様が付されており、あらわとなっている文字列の最後にも同様の渦巻き模様が確認されるとともに、実際、同碑文に積み上げられた石材の割れ目から、上の石材によって隠れた部分を見ても、文字らしきものが刻まれている形跡がなかったからである。いつ誰がこのような処置を施したかは全く明らかでないが、碑文の文字が見えるように配慮されたことは確かであろう。したがって、過去に設置された碑文を、何らかのかたちで転用する場合でさえも、時にその碑文を視覚的に生かす工夫が施されることもあったのである。そして、結果的にそれは、都市における記憶を蓄積することとなった。かかる行為がどれほど意図的であったかは定かではないが、過去に設置された碑全体のみならず、その刻文をも有効利用する姿勢が当時あったことは間違いないだろう。

では、なぜ劇場という空間が選択されたのだろうか。以前、筆者は別稿にて、2～3世紀に小アジアで増大した見世物の背景として、同地域で展開されていた都市間競争があることを指摘した⁵⁷⁾。まさにこうした見世物の実施場所の一つが劇場であり、そこには都市の内外

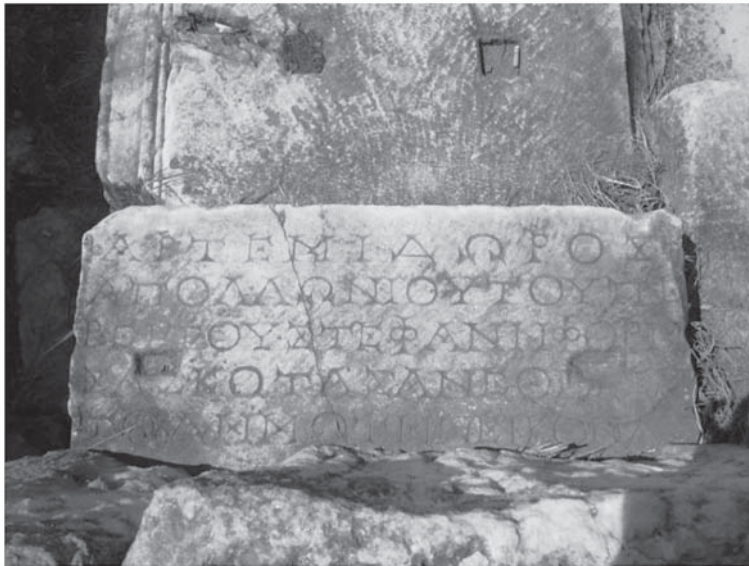


図9 コタス碑文

から多くの人々が集うこととなった。さらにすでに述べたように劇場は民会場としての機能も有していた。民会では都市の内外に関わる様々な問題が扱われたと考えられるが、諸顕彰碑文において民会の関与が示唆されていることから、顕彰に関わる決議も民会で扱われた問題の一つとして数えられる。したがって、2～3世紀に増大した祝祭としての見世物の実施場所として、そして顕彰の問題を扱う民会場として、劇場は都市においてとりわけ「コメモラシオン」と深い関係にある空間だったのである⁵⁸⁾。かかる「コメモラシオン」の場としての性質と都市間競争の高まりという時代背景があったからこそ、アフロディシアスの過去を想起させると同時に、そのような過去に基づく「現在」における同市の特権的地位を強調する点で、「アーカイヴ壁」の設置場所として劇場が最適だったのではなかろうか。もしそうだとすれば、2～3世紀にかけて、劇場における碑文の力点は、都市有力者から都市そのもののへとシフトしていったと理解されるのである。

(3)

記憶の媒体としての碑文、およびそれに基づく「記憶の場」としての劇場の側面は、帝政後期の状況によっていっそう強調される。当該期の特徴は、キリスト教関連の碑文、グラフィティの登場である。例えば、劇場の座席には十字架が刻まれたり、初期キリスト教のシンボルである魚やクジャクのグラフィティが確認されたりする⁵⁹⁾ (図10)。

一神教であるキリスト教徒にとっては、アフロディシアスの守護神たる女神アフロディテは異教の存在であり、それを認めることはできなかった。その証拠に、すでに取り上げた舞台緑のゼロス碑文では、奉献対象である女神アフロディテの名が削られている。さらに同女

神の名に由来する「アフロディシ阿斯」という名称さえも、彼らには受け入れられなかった。「アーカイヴ壁」における「アフロディシ阿斯」の文字の削除がそのことを例証している⁶⁰⁾。これらはいわゆる「記憶の抹消」であり、キリスト教徒が自らの都市の異教的記憶を払拭させようとしたのである。しかしながら、多くの「記憶の抹消」がそうであるように、同市においてもこの行為が徹底されることはなかった。「アーカイヴ壁」の中だけでも、「アフロディシ阿斯」の文字については、削除されたものもあれば、そのまま残されているものもある。したがって、これら「記憶の抹消」はある種の象徴的な行為、あるいはパフォーマンスであったのかもしれない。

キリスト教徒にとって、劇場は異教の神の名を有する碑文に溢れた異教的空間であっただろう。しかしながら、都市のキリスト教化が進行しても、劇場そのものが放棄されることはなかった。実際に、劇場の座席には緑党などいわゆるファクティオに関するグラフィティがいくらか確認されるし⁶¹⁾、他の碑文において「民会 (δημος)」という言葉が多数散見され、劇場は民会場としても依然機能していたと考えられる⁶²⁾。では、キリスト教徒たちは、異教



図10 上：魚のグラフィティ 下：クジャクのグラフィティ

の神の名に溢れた碑文、あるいはそれに満ちた空間をどのように認識していたのだろうか。この点を史料的に明らかにすることは容易ではないが、碑文と空間を結びつけて考える際の大きな課題でもある。この問題は、帝政後期におけるアフロディシアスの人々がいかに都市の記憶、もしくは「記憶の場」をとらえていたかということにも関わってくるだろう。それゆえ、この点を解明することができれば、「記憶の場」としての劇場、記憶の媒体としての碑文について、さらなる意義づけを与えることができるかもしれない。

おわりに

以上の検討を踏まえて、碑文をモノとしてみたとき、そしてそれをある空間の中に位置づけるときの史料としての有用性と限界について、さしあたり得られた結論をまとめたい。そもそも碑文史料は、文字が刻まれるという点で、テキストとしての価値を有すると同時に、文学的史料とは異なり、モニュメントとして、すなわちモノとしての側面を持つ以上、遺物としての価値も内包している。かかる点で、碑文は、考古学が主として用いる考古資料と、歴史学、文学といった分野で主に用いられる文学的史料の両方の特性をあわせ持つ史料であると言える⁶³⁾。このように、本質的に碑文がある空間を形成するモノとしての側面、そして社会状況の一端を反映したテキストとしての側面の両方を有するからこそ、物理的な空間と社会状況の間の論理を埋め合わせることが可能となる。まさに、この両者の論理を埋め合わせる、すなわち物理的な空間とそれに関わる社会の相互的影響という認識に立つのが現在の空間論であり、その意味で碑文は、この空間論を歴史学に適用する際に中心的な役割を果たすのである。言いかえるならば、我々は碑文を通して、空間を含めた社会を動的に観察することができるのである。

こうした碑文の可能性は、もちろんギリシア語碑文にのみ当てはまるものではない。それゆえ、このような可能性に着目することは、ギリシア世界全体の通時的な比較に加え、ギリシア語碑文とラテン語碑文、つまりギリシア、ローマ両世界の共時的な比較をも可能にするだろう。かかる比較を通じて、それぞれの言語の碑文の独自性が浮き彫りとなってくるのではなかろうか。実際、ローマ期のギリシア語碑文の中には、ラテン語を併記したものが一部存在する⁶⁴⁾。碑文として表出する、こうした新しい言語状況を空間的に位置づけることもまた今後の重要な課題の一つであろう。

また、テルメッソスにおけるアタランテ碑文、ゾイロス家が多数を占めるアフロディシアスの劇場舞台における碑文の事例で確認されるように、碑文建立の意図について公私両側面が想定される場合がある。少なくとも、公的な場所に設置された碑文について、それが伝えようとするメッセージは不特定多数の読み手に委ねられることとなる。かかる性質があるからこそ、意図されたか否かの判別は困難であるが、時に碑文は多義的な存在となりえたのである。空間はそれを取りまく社会的関係が実体化したものであるという現在の空間理解に則

るならば、ある空間を占める碑文もまた、単に公私という二項対立にとらわれることなく、それをめぐる社会的関係の中で理解されるべきであろう。

碑文が持つ特質の一つとして、そのメッセージの多義性、あるいは何らかの社会的関係の反映が考えられる以上、それだけ我々は碑文建立の主体とその意図について、常に想定されるあらゆる可能性を念頭に置かなければならない。例えば、アフロディシアスの事例でもみたように、善行者に関する碑文であっても、評議会や民会といった都市の組織の関与がみられるし、「アーカイヴ壁」のような文書群に至っては、碑文建立の主体が一貫していない可能性も十分に考えられる。他方、碑文の読み手の空間的な認識を明らかにすることは、碑文の建立側の状況以上に難しい問題である。パウサニアスのような史料を例外として、当時における一般的な碑文の読み手の認識については、いっそう慎重になる必要があろう。

さらに、実際的な問題として、はじめにも指摘したように、信頼のおける碑文の空間に関する情報がそれほど多くはないということである。発掘の段階でそういった情報がすでに失われている場合も多々あるだろうし、空間に関する情報を復元することは決して容易ではないことは明らかである。かかる状況ゆえ、空間研究に碑文を用いようとするとき、ある程度の制約があることは念頭に置いてしかるべきであろう。

しかし、たとえ以上のような限界があったとしても、碑文がある空間を形成する以上、その情報の多寡はあるかもしれないが、可能な範囲で碑文の空間的なコンテキストを踏まえることは、モノとしての碑文が有する特性を最大限に生かすという点で必要な作業である⁶⁵⁾。モニュメントとしての碑文の側面は、本邦でも多くの研究者によって共有され、すでにいくつかの論考が発表されているが、本稿では、より大きな文脈としての空間、空間論的転回を踏まえたうえでの空間に碑文を位置づけようと試みた。かかる観点に立つことは、碑文を建立することそのものの意義を解明することに結びつき、ロベールが述べるところの「碑文の文明」としての西洋古代を理解することに貢献するのではないだろうか。

註

※ I would like to thank Professor R.R.R.Smith for giving me permission to publish the photos of Aphrodisias I took in summer 2015.

※史料や欧語文献の略称は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012. およびウェブサイト *L'année philologique* (<http://www.annee-philologique.com/>) に掲載されているものに原則従った。

1) L. Robert, "Les épigraphies et l'épigraphie grecque et romaine", in Ch. Samaran (dir.), *L'histoire et ses méthodes*, Paris, 1961, 453-497, esp. 472.

2) かかる観点は本邦の学界においても徐々に共有されつつある。例えば、師尾晶子「碑文を見る人・碑文を読む人——古代ギリシアの公的碑文の開放性と閉鎖性」『碑石は語る』(アジア遊学 91) (2006年), 158-167頁; 前野弘志『アッティカの碑文文化——政治・宗教・国家——』広島大学出版会, 2007年; 中川亜希「古代ローマのモニュメントとしての石碑——権力と、記憶を刻むという名誉——」『歴史学研究』859 (2009年), 152-160頁; 前野弘志「公的碑文? 私的碑文? ——クライアントの視点から見たアッティカ決議碑文——」『早稲田大学地中海研究所紀要』7 (2009年), 3-15

- 頁：師尾晶子「古代ギリシアの碑文研究の新潮流——碑文習慣をめぐって」『西洋史学』242（2012年），57-69頁；奥山広規「レバノン共和国ティール市所在アル＝バース遺跡のネクロポリスにおける碑文調査」『西洋史学報』42（2015年），87-118頁。
- 3）碑文習慣については，R. MacMullen, "The Epigraphic Habit in the Roman Empire", *AJPh* 103-3（1982），233-246. リテラシーの問題については，さしあたり W. V. Harris, "Literacy and Epigraphy I", *ZPE* 52（1983），87-111; Id., *Ancient Literacy*, Cambridge, Mass., 1989を参照のこと。なお，これらの問題に関する動向を把握するには，師尾（2012年）57-59頁が有益である。
- 4）H・ルフェーヴル（斎藤日出治訳）『空間の生産』青木書店，2000年（原著1974年）。
- 5）P. J. Thonemann, *The Maeander Valley: A Historical Geography from Antiquity to Byzantium*, Cambridge, 2011.
- 6）M. Scott, *Space and Society in the Greek and Roman Worlds*, Cambridge, 2013. 同書については次の書評も参照されたい。増永理考，杉本陽奈子，山下孝輔，宮坂真依子，酒嶋恭平「M. Scott, *Space and Society in the Greek and Roman Worlds*, Cambridge, 2013」『西洋古代史研究』14，2014年，65-78頁。その他，近年刊行されたものとしては，Ch. P. Dickenson and O. M. van Nijf (eds.), *Public Space in the Post-Classical City: Proceedings of a One Day Colloquium Held at Fransum 23rd July 2007*, Leuven, 2013が重要である。
- 7）<https://www.atticinscriptions.com/>（最終閲覧2015年10月8日）。
- 8）<http://mama.csad.ox.ac.uk/>（最終閲覧2015年10月8日）。
- 9）<http://www.insaph.kcl.ac.uk/index.html>（最終閲覧2015年10月8日）。
- 10）以下の議論は次の文献による。O. M. van Nijf, "Inscriptions and Civic Memory in the Roman East", in A. Cooley (ed.), *The Afterlife of Inscriptions*, London, 2000, 21-36; Id., "Public Space and Political Culture in Roman Termessos", in O. M. van Nijf and R. Alston (eds.), *Political Culture in Greek City after the Classical Age*, Louvain, 2011, 215-242.
- 11）*TAM* III .1.4.
- 12）*TAM* III .1.62.
- 13）van Nijf（2011）216f.
- 14）現在，オリジナルの碑文は，ケンブリッジ大学古典学部が所有している。
- 15）van Nijf（2000）26f; van Nijf（2011）221-223.
- 16）van Nijf（2000）27.
- 17）29点の碑文が確認されると記してあるが，ナイフが註において列挙するのは次の26点である。
TAM III .1.4; 40; 43; 60-62; 74; 76; 87; 101; 115; 117; 119; 129; 130; 179; 195; 202-210.
- 18）*TAM* III .1.61; 101; 179.
- 19）*TAM* III .1.4; 43; 60; 62; 74; 76; 87; 115; 117; 119; 129.
- 20）van Nijf（2000）28f.
- 21）例えば，Plin. *Ep.* 10.33; 34. エフェソスにおける銀細工職人たちによる実際の暴動の事例としては，*Acts* 19.23-41.
- 22）van Nijf（2000）34f.
- 23）van Nijf（2011）216.
- 24）ミトリダテス戦争時のローマに対する支援に関しては *I Aph2007*. 8.3 を，特権付与に関する元老院決議は *I Aph2007*. 8.27 をみよ。なお，帝政期における特権の更新に関する碑文は以下の通り。
I Aph2007. 8.35-37; 102; 114; 114.12.
- 25）Ch. Ratté, "The Urban Development of Aphrodisias in the Late Hellenistic and Early Imperial Periods", in Ch. Berns et al. (Hg.), *Patris und Imperium: kulturelle und politische Identität in den Städten der römischen Provinzen Kleinasien in der frühen Kaiserzeit*, Leuven, 2002, 5-32.
- 26）J. Reynolds, *Aphrodisias and Rome: Documents from the Excavation of the Theatre at Aphrodisias*, London, 1982, xv; Id., "Epigraphic Evidence for the Construction of the Theatre: 1st c. B.C. to mid 3rd c. A.D.", in R. R. Smith and K. T. Erism (eds.), *Aphrodisias Paper 2: The Theatre, a Sculptor's Workshop, Philosophers, and Coin-types*, Ann Arbor, 1991, 15.

- 27) *IAPH2007*. 8.1.i; 5; 85.i; 108; 111-113; 115.
- 28) *IAPH2007*. 8.4; 52; 86.
- 29) *IAPH2007*. 8.38; 39.
- 30) *IAPH2007*. 8.23; 83; 84.
- 31) この舞台背景については、以下の文献を参照。N. de Chaisemartin and D. Theodorescu, “Recherches préliminaires sur la *frons scaenae* du théâtre”, in R. R. R. Smith and K. T. Erim (eds.), *Aphrodisias Paper 2: The Theatre, a Sculptor’s Workshop, Philosophers, and Coin-types*, Ann Arbor, 1991, 31-65; D. Theodorescu, “La *frons scaenae* du théâtre: innovations et particularités à l’époque de Zoïlos”, in Ch. Roueché and R. R. R. Smith (eds.), *Aphrodisias Papers 3: The Setting and Quarries, Mythological and Other Sculptural Decoration, Architectural Development, Portico of Tiberius, and Tetrapylon*, Ann Arbor, 1996, 127-148.
- 32) *IAPH2007*. 8.1.i.
- 33) Reynolds (1982) 38. なおゾイロスについては、L. Robert, “Inscription d’Aphrodisias: C. Julius Zoïlos”, *AC* 35 (1966), 414-432 も参照。
- 34) *IAPH2007*. 8.112.
- 35) *IAPH2007*. 8.108; 111; 113.
- 36) *IAPH2007*. 8.85.i.
- 37) *IAPH2007*. 8.84.
- 38) *IAPH2007*. 8.83.
- 39) *MAMA* VIII .564.
- 40) *IAPH2007*. 8.115.
- 41) Reynolds (1982) xv; Ch. Roueché, *Performers and Partisans at Aphrodisias: In the Roman and Later Roman Periods*, London, 1993, 1; Ch. Ratté, “New Research on the Urban Development of Aphrodisias in Late Antiquity”, in D. Parrish (ed.), *Urbanism in Western Asia Minor: New Studies on Aphrodisias, Ephesos, Hierapolis, Pergamon, Perge, and Xanthos*, Portsmouth, 2001, 135.
- 42) アテナイにおける碑文の設置場所の問題については、前野 (2007 年) 129-138 頁があり、こちらにも参照されたい。ラテン碑文の設置場所に関しては、島田誠「locus celeberrimus——古代ローマにおける記念建造物の設置と元老院決議等の公示について——」『西洋史研究』(新輯) 42 (2013 年), 1-24 頁がある。
- 43) 都市の公共建築物建設における恵与者と都市の公的組織との交渉については次の研究がある。A. Zuiderhoek, “Cities, Buildings and Benefactors in the Roman East”, in Ch. P. Dickenson and O. M. van Nijf (eds.), *Public Space in the Post-Classical City: Proceedings of a One Day Colloquium Held at Fransum 23rd July 2007*, Leuven, 2013, 173-192; Id., “Controlling Urban Public Space in Roman Asia Minor”, in T. Bekker-Nielsen (ed.), *Space, Place and Identity in Noethern Anatolia*, Stuttgart, 2014, 99-108.
- 44) 「アーカイヴ壁」に関する基本的な情報については、Reynolds (1982) 33-37 を参照。
- 45) Reynolds (1982) 36.
- 46) A. Chaniotis, “The Perception of Imperial Power in Aphrodisias: The Epigraphic Evidence”, in L. de Blois, P. Erdkamp, O. Hekster *et al.* (eds.), *The Representation and Perception of Roman Imperial Power: Proceedings of the Third Workshop of the International Network Impact of Empire (Roman Empire, c.200 B.C.-A.D.476)*, Amsterdam, 2003, 250-260.
- 47) *IAPH2007*. 8.31.
- 48) *IAPH2007*. 8.33. エフェソス、スミユルナ以外に、アウグストゥス帝がサモスに宛てた手紙もある (*IAPH2007*. 8.32)。
- 49) Ch・コッキニアは、皇帝が都市間関係の問題に関して、一方をあからさまに支持するような碑文はまれであると指摘する。また彼女は、ゴルディアヌス 3 世がアフロディシアスに宛てた手紙 (*IAPH2007*. 8.103) に基づいて、同市とローマの友好関係は、ローマの一方的な介入がないという点で「特権的距離 (privileged distance)」が存在したことを意味するのみならず、時にその緊密さがあだとなり、他都市の前で面目を失いたないためにも、ローマの要求、あるいは依頼を断ること

ができなかったという負の側面があったことを指摘している (Ch. Kokkinia, "Aphrodisias's 'Rights of Liberty': Diplomatic Strategies and the Roman Governor", in Ch. Ratté and R. R. Smith (eds.), *Aphrodisias Paper 4: New Research on the City and its Monuments*, Portsmouth, 2008, 51-59)。

50) *IAph2007*. 8.27, ll.91-93.

51) 設置場所に関する部分は、レイノルズによる校訂による (Reynolds (1982) 91)。

52) *IAph2007*. 8.28.

53) *I. Ephesos* 27, ll.120-123.

54) G. M. Rogers, *The Sacred Identity of Ephesos: Foundation Myths of a Roman City*, Routledge, 1991, 19-24.

55) P・ノラ (長井伸二訳)「序論 記憶と歴史のはざまに」P・ノラ編 (谷川稔監訳)『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史 対立』岩波書店, 2002 年, 29-56 頁を参照。

56) *IAph2007*. 8.4.

57) 拙稿「ローマ元首政期小アジアにおける見世物と都市——アフロディシアスの事例を中心として——」『史林』98-2 (2015 年), 104-136 頁。

58) 「コメモラシオン」と「記憶の場」については、P・ノラ (工藤光一訳)「コメモラシオンの時代」P・ノラ編 (谷川稔監訳)『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会 模索』岩波書店, 2003 年, 427-474 頁を参照。

59) 十字架: *IAph2007*. 8.60, Row 6.iii; 魚: *IAph2007*. 8.94: クジャク: *IAph2007*. 8.58, Row X. 魚については、そのギリシア語名イクテュス (ἰχθυς) の頭文字が「Ἰησοῦς χριστός θεοῦ υἱός σωτήρ (イエス・キリスト, 神の子, 救い主)」と結びつけられたため、キリスト教徒にとって重要なシンボルとなった。クジャクは、その羽が生えかわることから、初期キリスト教では、肉体の復活と関連づけられた。これらについては、G・ハインツ=モーア (野村太郎・小林頼子監訳, 内田俊一・佐藤茂樹・宮川尚理訳)『西洋シンボル辞典——キリスト教美術の記号とイメージ』八坂書房, 2003 年を参照。

60) 例えば, *IAph2007*. 8.28, ll.6-8, 11, 12; 8.31, ll.5, 19.

61) *IAph2007*. 8.54, Row 1; 8.59, Row 12.i; 8.61, Row 13.

62) 例えば, 3-4 世紀に属すると推定される *IAph2007*. 2.101 では、民会が評議会を顕彰しており, *IAph2007*. 2.111 では逆に評議会が民会を顕彰している。

63) かかる点については、1950 年代初頭に角田文衛が銘辞学としてすでに指摘しているところである。角田文衛「銘辞学の方法論」『古代学の方法 (角田文衛著作集 1)』法蔵館, 1986 年, 160-184 頁 (初出は 1951 年)。

64) R. A. Kearsley (ed.), *Greeks and Romans in Imperial Asia: Mixed Language Inscriptions and Linguistic Evidence for Cultural Interaction until the End of AD III*, Bonn, 2001 が史料集として有益である。なお、本邦における成果として、志内一興「小アジアにおけるギリシア語・ラテン語併用碑文——社会言語学的考察の試み——」『歴史学研究』820 (2006 年), 142-150 頁もあわせて参照されたい。

65) 角田文衛 (1986 年), 180 頁では、次のように指摘されている。つまり、碑文のような物的側面を有する史料を扱う際は、それを単なる遺物として扱う、あるいはそのテキストだけに注目するだけでは不十分であり、その遺物としての情報 (出土地や出土状態などを含める) や文字情報など、史料そのものから得られる種々の情報を総合的に検討し、そこからできる限り多くのことを読み取ろうとすることが、そのような史料を扱う歴史家としての責務である、と。